

平成21年度スポーツ指導員・技術員辞令交付式における懇談会要旨

日 時：平成21年4月6日（月）13:40～

場 所：山形県スポーツ会館 3階 特別会議室

出席者：スポーツ指導員；山田かがり、吉田進、山口喜代美、池田（原田）めぐみ

スポーツ技術員；市川倫子、矢口小百合

県体育協会；神尾芳昭常務理事、佐藤通隆事務局長、長谷部茂事務局次長、本間達雄総務課長、
佐藤裕子書記

県スポーツ保健課；遠藤啓司課長、齋藤隆スポーツ振興主幹、武井幸二指導主事、鈴木章人指
導主事、遠藤久指導主事、清水一成指導主事

◎自己紹介

【山田】昨年度は3冠を獲得したので、今年は国体を含め4冠を狙っていきたい。

【吉田】昨年の都道府県女子駅伝は31位だったが、今年は14位と10位台を回復できた。若い選手が活躍し、明るい材料が揃っているので、再度入賞圏内を目指したい。

【山口】トレーナー、母である立場で7期になる。食事で身体をつくることを広めてきたが、試合前の食事メニュー等は定着してきた。パイオニアは4名の全日本選手がいても勝てないのは何故か？スポーツライフマネジメントの重要性を考える。

【池田】今年是指導員という立場で何ができるのかを考え、お手伝いしたい。また、アンチドーピング機構の広報員をしているが、「無知は最大のウィークポイント」となるので、その活動も増やしたい。ロンドンを目指して来年は競技に復帰したい。今年一年、自分と向き合い考えを深めたい。オリンピックを目指すために必要なことを伝えられたら。

【市川】昨年の国体は、ルールも変わり作戦面で失敗したが、今年はメンバー構成を考えて臨みたい。現在ランキング上位にいるので、ポイントを貯めて世界選手権に出場したい。フェンシングができることへの感謝の気持ちを、結果として残せるよう頑張りたい。

【矢口】今シーズンを振り返り、克服すべきことが4つ見つかった。レースをこなすごとに感覚も戻ってきて、全日本のメンバーと同等に走れるようになってきた。オリンピックに出たいという強い気持ちを持って頑張っていきたい。

◎佐藤事務局長を中心に懇談

《事務局長》チーム目標や状況などを話してください。

【山田】指導者としては初めて。山形の方は優しく、周りの人達も良い人ばかり。選手も良い選手ばかりだし。今年引退者3名、新人3名。メンバーの誰が出ても力が落ちないチームを目指したい。国体はリーグ2部のチームが出るため、勝ち抜くのは簡単ではないが頑張りたい。

《事務局長》山田イズムが出てきて、山田さんの考え方が伝わってきたのでは？

【山田】コミュニケーションをよくとるようにしている。選手は勤務があるので、勤務の後のバスケケットが嫌にならないよう、厳しさの中にも楽しさを持ち、自立してやってほしいと思っている。

《事務局長》山銀自体も強くなってほしいが、山大や山商も活性化されている。

【山田】依頼があればいつでも練習ゲームなどを行っている。共にレベルが高いので、遠征が大変な時には良い練習になる。選手にとっても負けていられないという発奮材料になり、いい刺激となっている。スポ少のクリニックもしているが、選手は目を輝かせ生き生きと教えている。楽しいし、自分たちの次の活力になる。

《事務局長》14位、ご苦労様。3年前4位、4年前3位の実績があるので、県民の要求は高く監督としても大変なのでは？

【吉田】あの時は、つながりが良かった。ジュニアから育った選手が繋いでくれた。今年もそのような状態にある。安定した走りができるのが今のチームの良さ。

《事務局長》年間を通して練習会を開いているのか？

【吉田】中高生のレベルが下がったのが昨年の31位。昨年はレベルアップとして年間を通して練習会をもった。タイムの目安を示して水準を上げたり、全体のレベルを上げたことが好成績に繋がった。

《事務局長》来年の見通しは？

【吉田】現在のレベルをキープして練習していけば、14位を上回れる。高校生のレベルをどう引き上げられるかが問題。

《事務局長》パイオニアの試合は関心を持って観ているが、今年はいかがか？

【山口】技術やセンスは揃っているのに勝てないのは「チーム力」ということなのだろう。何が悪いということではなく、最終的に心をひとつにすることだろう。スポーツができることに感謝することが大切なのは、全日本選手がコートに4人いるのに勝てない。全てのことが悪循環になっている感じ。

《事務局長》栄養指導の面で感じたことは？

【山口】栄養指導を続けて11年になるが、今は食べることに對してもさらにワンランク上の指導をしていかないと勝てないレベルになっている。栄養や食事を考えるのは、チームとして当り前のことになっているので、さらにその上が求められている。勉強していかないと勝てない。最近では台所に立たないお母さんが増えており、保護者に対して指導していくことも大切。山形の郷土料理のレシピを使って指導している。

《事務局長》北京で15位、アテネで28位。直接観戦したが、まさに紙一重の勝負だった。また、ロンドンを目指したい。その辺りのことを話してほしい。

【池田】アテネは出たという印象だけが強い。北京はどうやったら勝っていけるかをイメージでき、準備を万全にやった上で臨んで15位。次のロンドンを目指したいと思ったのは、まだ準備が足りないのが分かったことと、太田選手がメダルを取った姿を間近で観て、あの勝負にもう一度入りたいと思ったから。パイオニアはどの世界にも必要。日本のフェンシングでママさん選手はいない。誰かが始めないと。母として頑張りたい。このことをアドバンテージとして戦いたい。

《事務局長》大変だがやりがいはある。ロンドンという新たなチャレンジを実現できるよう、これまでと違うトレーニングや、精神的な練習も見つけ出してほしい。

《事務局長》大器晩成型の市川さん、世界を転戦してどうだったか？

【市川】世界で戦うのは2～3年ぶり。その時のランキングは下だったが、勝たなければという焦りの気持ちがあった。今回も始めは、外国選手は戦い方が違うという意識が強すぎた。イタリアではポイントが取れず、日本に帰りたいほど落込んだ。しかし、決めつけず普通に戦い方をすればいいと感じて臨んだフランス大会では、4勝と試合内容も安定していた。「自分らしさを持って戦うことが大事」ということが見えてきた。5～6月に大会が続くが、安定したプレーをしたい。

《事務局長》ひとつは世界で戦う。もう一つは国体でどう戦うか。これは、池田さんにも言えることだが、頑張ってもらいたい。

《事務局長》一年のブランクを克服しての国体優勝だが、一年経ってみてどうか？

【矢口】一年前は「ここに居ていいのか」と思うくらい、自分に自信がなかった。身体づくりもトレーニングも、どうしていったらいいのか分からなかった。「ゆっくり、長く」のトレーニングを続けて、夏ごろから身体も絞れてきたし、スキーの楽しさも感じられてきた。

《事務局長》先程の4つの課題とは？

【矢口】①疲れてきても身体を動かさなければならぬレース後半のため、上体の強化とバランスを培う。②インナーマッスルの強化。③登りのランニングの強化。④故障しないための正しい身体の使い方（姿勢）を身につける。しっかり自己管理をして、オリンピックに出たい。